

世界聖餐日・世界宣教の日 説教 「私たちの心の内にあるもの」 要旨
牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2021年10月3日

マタイによる福音書 6:16~24

緊急事態宣言が出され、長期にわたり礼拝を非公開としましたが、その間、皆さんのことを日々お祈りに覚えるものであります。ですから、礼拝再開に当たっては祈りが聞かれたと思ったわけですが、それゆえ、そのことを神様に感謝するとともに、またそこで思ったことは、皆様と共に礼拝を献げることの幸いでありました。ただ、それは私だけでなく、恐らくは、皆さんも同じだったのではないのでしょうか。顔と顔を合わせることは私たちの信仰の大前提であるわけですから、それが許されて嬉しくない人は一人もいないと思うからです。ですから、そう考えれば、この二ヶ月の間にあったことは、ある意味で強いられたことではあります。けれども、この度の礼拝断ち、教会断ちがあればこそ、私たちの信仰は返って強められることになったとも思うのです。

そこで、早速、御言葉に聞いて参りたいと思いますが、ところで、礼拝断ち、教会断ちを強いられた私たちに、この日最初に与えられた御言葉がこのイエス様のお言葉でありました。そこでは、四つのことが言われています。一つは、断食、つまり、命の糧を断つということです。そして、二つ目が私たちの富の置き所、つまり、私たちの命の拠り所がどこなのかということです。そして、三つ目はその私たちの身体的特徴についてです。つまり、私たちの生きるその環境によって、私たちがいかなる身体的特徴を有するのかということです。そして、四つ目に言われていることは、それゆえに私たちには限界、制約があるということです。つまり、その身体的特徴をもってしても、なお克服できないものがあるということです。そして、これらの御言葉に聞きつつ思ったことは、神様はやはり私たちのことをお忘れではなかったということでした。

礼拝断ち、教会断ちを強いられた私たちにとりまして、この二月は様々な意味で揺さぶられる毎日でありました。そして、この、ある種の制約の下に日々考えさせられたことは、その身の置き所がどこなのか、そして、自分自身がいかなる者であるのか、私たちが日々意識させられたことはこの二つのことでもありまし

た。しかし、そうした毎日の中で、私たちはいたずらに不満を募らせたわけではありません。その思いを祈りの内に神様とイエス様に伝えるものでもありました。従って、その私たちが今日こうして待ち望んだものを手にしているのは、忍耐し、祈りつつ待ち望んだからでもあります。ただ、ここに至った理由はそれだけではありません。他にもないイエス様ご自身がここでその私たちのことを「体の灯火は目である。目が澄んでいれば、あなた方は全身が明るい」と仰っておられるように、私たちが忍耐し、祈ることが許されたのは、イエス様が仰るこの身体的特徴を有していたからです。そして、私たちにこの恵みが与えられているのは、私たちの身の置き所、命の置き所ゆえのことでもあります。では、その身の置き所とはどこか、それは神様の御心の中です。ただ、私たちの中には、かつての私がそうであったように、素直にそうは思えない方もきっとおられることと思います。けれども、主の御前にある私たちの目が濁り、また、その全身が暗くくすんでいるとして、果たして私たちがこの場にいることができるのでしょうか。

私が「牧師らしくない」と人から言われることが多いように、自分は目が濁り、それゆえ、どこか暗いと、自分に自信が持てずにいる方もいることでしょう。けれども、人がどう思い、また自分がどう考えようとも、主の御前にあってはそのような気遣いは無用です。なぜなら、主と出会ったという事実は、誰がどう思おうとも変えることのできないものだからです。それゆえ、主に背中をさすられ、ぎゅっと抱きしめてられて、目が濁り、暗いままでいる者は私たちの中には一人もおられません。そして、それが今この時でもあります。ですから、そこで大事なことは、自分は違うなどと嘯くことではありません。イエス様がそう仰ることに素直に肯くことで、間違っても、自分は違うなどとは思わないことです。それは、私たちのこの身体的特徴を含め、様々な制約の中で与えられるものが神様の祝福でもあるからです。従って、こうして礼拝に集められている私たちは、一人も余すところなく神様の祝福

に与っているわけですから。そして、その上で、この日のイエス様のお言葉を喉元過ぎればなんとやらとするのではなく、この神様の祝福がこの日、この瞬間だけで終わらずにこれからも続いていくものであることを、御言葉を通し、しっかりと心に刻みたいと思うのです。ただし、そのためには私たちが先ず覚えなければならないことがあります。

恐らくは、私たちの心は、今満たされたとの思いで一杯になっていることと思えます。けれども、この御言葉を通し私たちが先ず聞かねばならないことは、満たされた今についてはありません。満たされたとの思いのそれ以前の状態です。つまり、満たされていないとの呻きであり、何か足りないとの嘆きです。自分にとって一番大切なものが欠乏、欠落しているというこの思い、この気持ちを先ずは思い出したいと思うのです。それは、私たちに与えられ、また備えられている神様の祝福は、やりたくてもできない、やろうとしても叶わない、私たちがそう思うそのときにも変わらずに与えられているものでもあるからです。ところが、私たちはその時そうは直ぐには考えない、それはどうしてなのでしょう。

イエス様は、ここで「断食するときには、あなたがたは偽善者のように沈んだ顔つきをしてはならない」と仰るのですが、この言葉を皆さんはどのように受け止められたのでしょうか。このイエス様のお言葉は私たちにやせ我慢を強いるものではありません。イエス様は「人に見てもらおうとして」行う偽善を固く戒めておられます。従って、そこから分かることは、イエス様がやせ我慢、空元気、空威張りといった、そういう空しいことを私たちに求めてはおられないということです。ただ、私たちの日々の生活においては、私たちが欲しいと思うすべてものが満たされるわけではありません。しかし、たとえそうであっても、私たちのすべてをご覧になっておられるのが父なる神様でもあるのです。このことはつまり、何か欠けている状態が、私たちの苦しみ、悲しみの理由とはなり得ないということです。なぜなら、神様の祝福は私たちにとっては日常的に絶え間なく注がれているものであり、それゆえ、イエス様の御後を辿る私たちの日毎なす様々なことは、それがたとえどのようなものであれ、神様の祝福の外に置かれることはないのです。そして、それを知らされるのは、私たちがイエス様の十字架を

経験すればこそでもあります。まただから、そこで私たちは福音の真実に触れ、神様の祝福が私たちより取り上げられることがないと、深く深く知らしめられることになるのです。

従って、私たちが神様とイエス様を信じ信頼するのは、この聖なるお方にこのように日々触れているからであり、つまりは、その実感が私たちをしてそうさせるということです。それゆえ、イエス様の御後を辿りつつ過ごした、この度の礼拝断ち、教会断ちは、そのことを私たちに深く覚らしめるものでもありました。しかし、ここでイエス様が仰ることを私たち以外の人々が聞いたら、果たしてどのように思うのでしょうか。それは、ないものがあるかのように思わなければならない、信じなければならない、そういうことでもあるのでしょうか。ですから、それは、世間で言うように、やはりやせ我慢、空元気、空威張りということにもなるのでしょうか。けれども、もちろん、そうではない。このことはつまり、私たちにとっての当たり前は、私たち以外の人々にとっては当たり前ではないということです。つまり、イエス様が仰っておられることは非常にローカルなものであり、ある意味で特殊な、特異なものであるということです。そこで、皆さんに一つお尋ねしたいのですが、では、この特殊性について、もし隣り人から尋ねられたなら、その時、皆さんはどのように説明されるのでしょうか。

そこで、私たちが通常行うことは、キリスト教に「ついて」の説明です。けれども、信仰は神様とイエス様に対する直接的な信頼に基づくものであり、つまりは、私たちの神体験、キリスト体験、いわゆる、キリスト教的宗教経験が私たちをしてそう信じさせるということです。それゆえ、入門書を繙くがごとく、言葉数が多ければそれですむという話ではありません。ここでイエス様が仰っておられるように、信仰の要件として求められることは間接的な経験ではなく、直接的な経験であるからです。そして、私たちにそれが許されているのは、パウロが「我らの国籍は天にあり」と言っているように、私たちがこの特殊な環境下に生きているからです。ですから、ここでイエス様が「神と富にとに仕えることはできない」と仰っていることはそれゆえのことでもあります。つまりは、「主我らと共にいます」現実を真実として受け入れられるところで経験されるもの、それが私たちをしてそう信じさせるという

ことです。そして、その直接的な契機となるものが、私たちがこうして集められている主の教会です。ですから、この二月の間、私たちが感じた様々な思いは、この大事なものから切り離されたがゆえのことでもあります。それゆえ、そのときの顔つきは、普通に考えるなら、今とは正反対のものだったと言えるでしょう。しかし、私たちの顔が暗く沈みがちになるのは、礼拝断ち、教会断ちに限ったことではありません。

私たちが満たされたいと願うのは、いつも何か必ず不足していると思っ

ているからです。それゆえ、そこから出てくる言葉は呻きであり、嘆きでもあるのでしょう。あれもない、これもない、これもできない、といった神様とイエス様への恨み辛みがつい口をついて出てしまうのはそのためです。けれども、そうであるからこそ、ここでイエス様が仰るように、普段通りにしていることが大事になってくるわけです。それは、今の私たちがそうであるように、イエス様が「澄んだ目、明るい体」と仰ることが普段通りの私たちの姿でもあるからです。ですから、イエス様がここで一番仰りたいことは、「私たちの日常を生きよ」ということでもあるのでしょう。まただから、私

似体験であったと、つまりは、すべては私たちの思い込み、思い違いであったと、そういうことになりはしないでしょうか。そして、もう一つ、私たちにとって深刻な問題は、そのことに抗おうとせず、この思い違いを認めてしまっているということです。まさに、神か富かと問われた場合、神以外のものに身を置いてしまっているということです。それは、私たちが信仰というものを誤解しているからでもあります。では、私たちはどうしてそのように誤解してしまうのでしょうか。

満たされた今と渇きの中にあった少し前とを比べ、私たちが少し前の状況を好ましく思えないのはどうしてなのでしょう。それは、何か足りない、何か欠落していると思っ

ているからです。そして、そのように思うのは、私たちが神様の祝福を、またイエス様の言葉を量的に理解しているからでもあります。つまり、自分の欲しいものが数多く手に入ればそれでよし、反対に少なけれ

「ポイント」がいかに高いかということです。けれども、このことはまた、この「せざるを得ない」ということを手がかりに、質の高さについて私たちが知ることができるといえることです。ただし、その場合、数の多い少ないがその基準ではありません。そもそもそのところで、量的なものを基準とするということはどういうことなのかということなのです。それは、量的なものに頼っている限り、それは他に代わりが利くということなのです。それゆえ、役に立たなくなれば、捨てて新しいものを手に入れればいいわけで、けれども、その反対に質を問うということでは、他に代わりが利かないということなのです。それは、これしかない、これだけだというその固有性こそが大事だからです。しかし、これしかないということとは、同時に、何か足りない、何か欠けているということでも、それを良しとするということなのです。つまり、不十分さ、不完全さを良しとするということですが、このように質を問うということは、気に入らないものであっても敢えて排除せず受け入れるということなのです。しかし、私たちが敢えてそれをすることとは、リスクを負うということなのです。ですから、私たちが量的なものに過剰に反応してしまうのは、量の多い少ないがその理由ではなく、リスクを極力回避したいから、一言で言えば、損をしたくないから、それが一番の理由だということなのです。

すでに申しましたように、不完全で不十分である私たちが量的なものを求めてしまうのは仕方のないことです。まただから、私たちは、自分の力でその不十分さ、不完全さをコントロールしようとするのです。ただし、私たちがそこに立ち止まり、神様の御心を慕い求めたとしても、そこに悔い改めが生じることはありません。神様の方を向いていないだけでなく、満足できる状況を自分で作り出そうとするからです。けれども、このコロナ下、私たちが率直に感じたことはどういふものだったのでしょうか。それは、自分の力ではどうすることもできないということでした。そして、礼拝断ちの期間が明けて満たされた今、私たちが素直に感じていることは、神様を礼拝できる喜びと、主にある兄弟姉妹と一緒にあることの喜びです。そして、暗い顔しかできなかつた私たちがそのように変えられていったのは、私たちと神様、イエス様、さらには、主にある兄弟姉妹との関わりが掛け替えのないものだと思つたか

らです。つまり、自分の思い通りにならなかつた二月を過ごし、他に代わりが利かないものが私たちには与えられているのだと、このことを深く知らされたということなのです。ですから、私たちが今感じている喜びはそういう性質のもので、量が満たされたことがその理由ではありません。けれども、だから量が少なくてもいいということでもありません。私たちがこの時感じている喜びはとても大きなものでもあるからです。しかし、その大きさは、私たちが考える量の多い少ないということではありません。代替不可能なものに触れていることの喜びであり、その機会を神様がこうして私たちに備えてくださったことの喜びです。そして、礼拝断ち、教会断ちを強いられた二月の間、この立ち止まらざるを得なかつた状況の中で私たちが知らされたことは、礼拝も教会も主にある兄弟姉妹も、この信仰によって私たちに与えられているすべてのものが私たちにとって掛け替えのない大切なものであるということなのです。

困難に直面した際、私たちは新しい何かを求めます。けれども、私たちは立ち止まることで知つたのです。自分がいかに多くのものを見過ごしにしてきたのか、それゆえ、見過ごししてしまったものとしっかりと向き合うことがいかに大切であるか、私たちが知つたことはこのことでありました。そして、それは、これまで当たり前のように語られてきた神様の御言葉であり、イエス様のお言葉です。いつも横にいるのが当たり前であつた主にある兄弟姉妹であり、この当たり前なもの有り難さ、つまり、それが、私たちが生きるこの場所の質の高さであり、私たちはそのことを立ち止まることで知つたのです。それが今の私たちであり、ですから、そう考えるなら、立ち止まること、立ち止まらざるを得ないことは、私たちにとっては大切な恵みの機会でもあつたのです。これまで私たちが見過ごしにしてしまった、平凡であるが私たちにとても大切なものが何かを深く広く知ることになつたからです。ですから、このことをもう一度心に留め、新しい歩みを今日からご一緒に始めて参りたいと思います。祈りましょう。